

民俗資料館だより

第6号 1999. 3. 30
発行 加茂市民俗資料館
住所 加茂市大字加茂229-1
電話 0256-52-0089
FAX

民俗資料館の一層のご利用を期待して

加茂市民俗資料館長 田澤 弘一

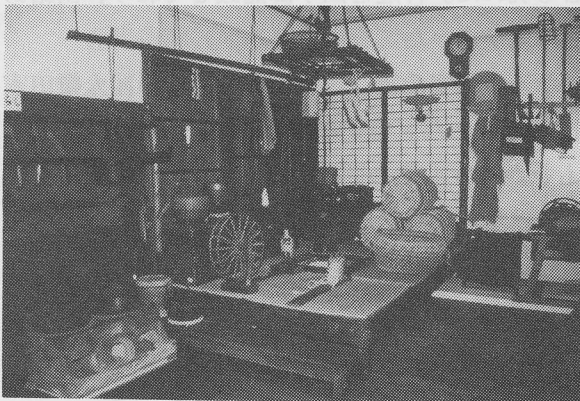
皆様方には、日頃民俗資料館をご利用頂きまして有り難うございます。さらに、いろいろな面でご指導、ご協力を頂いておりますことに対し心から感謝を申し上げます。

当資料館は、市民の皆様の郷土への愛着心の高揚と、生活様式の近代化に伴い各ご家庭で使われなくなった民具や作業に用いた道具、さらに歴史的な資料などを後世に伝えることを目的として、昭和49年4月に旧下条中学校校舎を転用して設置されたことが、始まりであります。

その後、平成6年9月に現在の加茂山公園内に移転いたしました。本年は開館25周年を迎えることになりました。

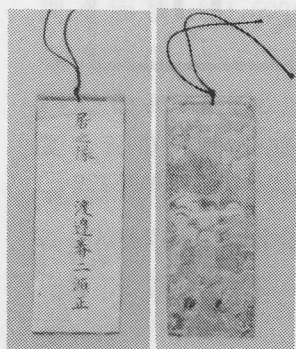
収蔵品は、約20,000点あり、現在はそのうち約1,200点を展示いたしております。展示品は、市内の遺跡から出土した土器、加茂の産業、民俗などに関する貴重なものばかりで特に小学校の教材としてもご利用頂いております。

折しも、2月には加茂市史編さん委員会及び編集委員会が設置されましたが、市史編さんに関連する資料も当館にかなりあると思われますので、資料が有効に生かされることを望むとともに、皆様方から一層資料館をご利用頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。



I 居之隊(きょしたい)と加茂の国学

溝 口 敏 磨



民俗資料館の展示品に、戊辰戦争時に民間有志が組織した居之隊の隊員、渡辺^{けんじ}春次(現 田上町川ノ下)の付けた肩章がある。同隊は、越後の富農商や医師・儒学者・国学者などの知識層が、王政復古を掲げた新政府に味方するために組織したもので、はじめ方義隊^{ほうぎ}と称した。当初、大隊旗を授けられて、天朝政府直属の親兵として戦う意気込みを示し、一部は遠く庄内地方にまで転戦した。だが新政府軍は、農商有志らが武士に肩を並べようとする上昇志向を封じ込める姿勢を次第に明確にし、居之隊に対しても、地理案内や情報収集役にとどめようとした。

戊辰戦争終結後の明治元年(1868)11月、居之隊は松田秀次郎隊長以下三小隊が引き続き結隊を認められ、加茂や水原などで警備役などに使われた。ついで3年1月、同じように越後の各地で警備役に従事していた、越後の農商有志隊である北辰隊^{ほくしん}・金革隊^{きんかく}の隊員と合わせて、合計150人が第三遊軍隊として東京に呼び集められた。親兵への取立かと勇んで上京したものの、士族軍と差別された取り扱いと厳しい訓練に、やがて失望と不満が強まった。政府も薩摩・長洲・土佐3藩からの親兵結集の目途がたったことから、同年9月、第三遊軍隊に対し帰郷解隊を許した。戊辰戦争以来の働きに応じて、隊長松田には50両、一般隊員には、各15~25両の功労金の下されたが、3年の労苦と失費に報いるには余りに小さかった。

この居之隊の隊長松田秀次郎は、旧狭口村の庄屋笠原家に生まれ、親戚の安田興野(現 見附市)庄屋笠原家の養嗣子となった人である。松田とは笠原氏の遠祖の姓で、家族に難が及ぶことを恐れて変名を用いたという。居之隊には、秀次郎の兄笠原新吾をはじめ加茂地域(含、三条・田上)からの参加者が多い。この背景として考えられるのが国学の土壌である。

国学は日本古来の思想や学芸を追求する学問で、外来の儒学を公認の学問とする徳川幕府の政治が揺らぐにつれて広まった。やがて、幕末の風雲急を告げるなかで、国学信奉者のなかからは、単なる学問に飽き足らず急進的な尊皇論を説く者も現れた。神道と国学は通底しており、由緒ある青海神社の鎮座する加茂郷は国学が盛んとなる素地があったことになる。

その加茂の国学の草分け役が雛田^{ひなだきてい}葵亭である。葵亭は天明7年(1787)青海神社の社人雛田^{しゅうけい}家に生まれ、他国に遊学して国学を修め、帰郷後国学を教えた。息子松^{しょうけい}溪も京都や江戸の諸家に学び、父葵亭の死後家塾を継いで一層隆盛におもむかせた。その間、小池内広・小柳春^{しゅんてい}堤や三条の村山半牧^{はんぼく}らの居之隊関係者と密接な交わりを続けた。田巻三郎兵衛・高橋健蔵(共に現 田上町)両家が国学や神道に傾倒し、一族から居之隊員が続出したのも、雛田父子の影響があったものと思われる。

II 平成10年度の歩み

1、入館者数

平成10年4月～平成11年2月

	市 内	市 外	計
大 人	502	844	1,346名
小中学生	164	308	472名
計	666	1,152	1,818名

2、資料収集の状況（2月末現在）

本年度は6名の方から11件14点のご寄贈を賜りお礼を申し上げ紹介させていただきます。

〈寄贈品名〉

- ・鉄兜 ・飯盒 ・水筒 ・あんか ・箱まくら ・ざる ・鍋
- ・毛糸編み機 ・区旗(三脚付き) ・傘鉾の垂れ幕 ・写真

〈寄贈者ご芳名（敬称略）〉

瀬高 ハル 小林孝三郎 横山 久子 田沢美和子
岡田 倉吉 斉藤 久也

3、レファレンス・サービス及びアンケート・調査（民俗資料館への問い合わせ）

平成10年度（4月～2月） レファレンス8件、アンケート・調査11件

A レファレンス

- ・展示してある「加茂歴史番付」の作成年について
- ・国産第1号マカロニーの製造について
- ・水戸天狗党員が加茂に居住していたと聞くがその記録はないか
- ・「小京都加茂」と言われているが、歴史的な資料等について
- ・戊辰戦争後作刀師「兼定」は加茂に何時ごろまでいたのか
- ・加茂山要害砦後から出土したと言われる焼き米は現在何処にあるのか

B アンケート・調査

- ・近代遺跡（加茂農林高等学校 正門）の調査・報告
- ・全国博物館総覧 ・活動調査 ・基本調査
- ・近代歴史資料 緊急調査
- ・入館者数における児童・生徒数の把握
- ・「平成10年度 市町村文化行政の現状」に係わる調査について

4、館外活動

① 古文書講座

「加茂って昔、どんな所だったのだろう」そんな時「古文書を読んで昔の加茂を知りたい人あつまれ」で延べ184名の参加者でした。講師も4人の先生をお願いしてそれぞれ個性ある講義に熱が入っていました。

○ 日 時 9月2日 9月9日 9月16日 9月30日 10月7日

各日 午後7時～午後9時

○ 会 場 加茂市民体育館内 公民館 第四研修室

○ 講 師 加茂市文化財調査審議委員

関 正平氏（2回） 溝口 敏麿氏

佐藤 賢次氏 長谷川昭一氏

○ 内 容 「江戸時代の暮らしの諸相」

第1回 関氏 ー加茂の馬市と陣ヶ峰への移転ー

- ・安永7年（1778）近郷で馬市が立てられるようになり、加茂町の馬市が次第に衰微してきている。加茂の馬市の時に、馬宿を営んで勝手に売買をしないでほしい。
- ・加茂川右岸の百姓たちが、洪水のため陣ヶ峰の御林山への移転願ひ。等について読解する。

第2回 溝口氏 ー寺と檀家ー

加茂新田「覚満寺」に対して

- ・自分のところの息子が悪事を働いてご苦労を掛けたの挨拶
- ・新発田「潮音寺」より離檀の挨拶
- ・不義密通での「駆け込み寺」の挨拶
- ・「浄官寺」檀家のものが婚姻によりそちらの檀家になるが確かな人物なのでよろしく、「遺訓」等を読解する。

第3回 佐藤氏 ー「人の移動ー浸入・逃亡・人質」ー

- ・第一次、第二次の越後一揆で、田畑を荒らされたり見殺しに遭ったりした加茂
- ・村からの脱走を止めるために人質を取っていた、・年貢未納の百姓に対する処置ー代官所で働かせる、秋になったら田んぼか子供か妻を売ればなんとかなる、秋まで待つ、見捨てる等々読解。

第4回 長谷川氏 ー村松藩・賦役と農民の生活ー

- ・七谷西山村の訴え書・江戸時代、村松藩の村のあり方、・江戸藩邸で奉公する権利、・百姓の三段階の身分一本百姓、名子百姓、家内下・村松藩の村役人ー大庄屋、肝煎、組頭、五人組について読解。

第5回 関氏 ー文政11年の三条地震における加茂近辺の様子ー

- ・1828年の地震被害について、加茂町から幕府領「出雲崎役所」への被害届けについて、・作者不明だが上保内の70歳の人が記録したと思われる「中越大変地震録」に詳しく記されている加茂近辺、について読解解説。

② 歴史講演会

加茂の郷土史に関しては「生き字引き」的存在であり、83才の高齢にも拘らず現在でも新事実に対して更に探求を続けられている講師の熱弁は、聴き手に大いなる感銘を与えた。

- 日 時 10月17日（土） 午後2時～午後4時
- 会 場 加茂市民体育館内 公民館 第3研修室
- 講 師 加茂市文化財調査審議委員長 古川 信三氏
- 演 題 「青海郷・その周辺」

八幡林遺跡から出土した木簡を読解することによって、青海郷の存在を明らかにし、用意された貴重な資料（史料）をもとに、加茂市が青海郷の中心であったことを明確にされた。

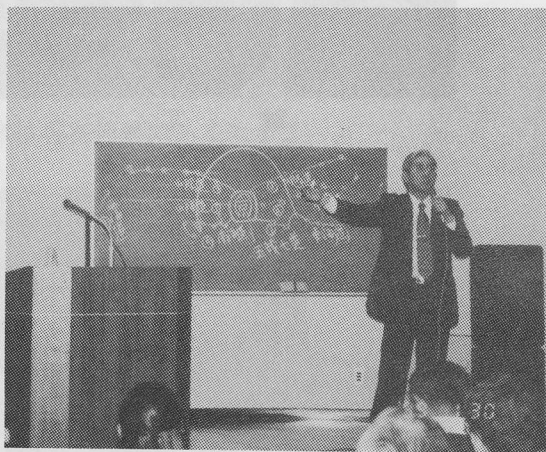
また、吉田東伍著、「大日本地名辞典」に記述されている、「加茂は元来賀茂神社の社領である一邑であって旧石川庄と号し、青海の旧地であろうとするのは誤謬甚だしい。」の説に対しての反論は明快であった。

③ 特別歴史講演会

昨年度の外部講師を招いての特別歴史講演が好評であったので、再度開催しました。降雪とインフルエンザの猛威にもかかわらず、109名の熱心な参加者で、盛会でした。

- 日 時 11月30日（土） 午後2時～午後4時
- 会 場 加茂文化会館 小ホール
- 講 師 新潟大学教授 人文学部 小林 昌二氏
- 演 題 「古代蒲原青海郷をめぐる」ー加茂市域の古代史の分析ー

講演会用の資料に基づいての説明と新聞の切り抜き資料（講師自身の記事）から八幡林遺跡で発見された、一号木簡の解説。



Ⅲ 展示資料紹介コーナー

2階の第4展示室の奥にある「陣ヶ峰瓦」を紹介する。瓦の需要が高まってきた平安後期に瓦を製造・販売と瓦で屋根葺きの仕事をする専門職人として独立していた。その後、寺院などからの需要も増えて、瓦焼きは瓦大工とも言われるようになった。江戸時代になって都市の発展とともに民家の屋根が瓦葺きとなって瓦の需要が急増した。

陣ヶ峰で瓦の生産が始まったのは、天保年間（1843：歴史年表）、三河国（愛知県）（石川県経由か）から来た職人によってその技術が伝えられたという。

旧新潟税関（現新潟市郷土資料館—重要文化財—）や三条市の本成寺の屋根瓦にも、陣ヶ峰瓦が使われているという。

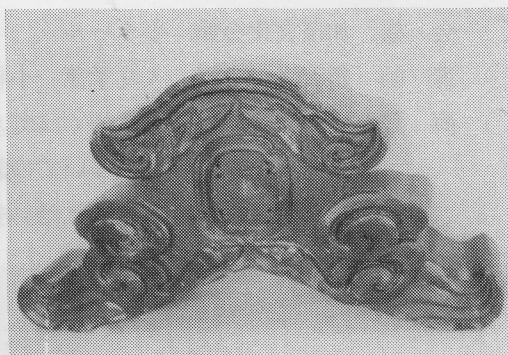
瓦葺きの普及のなかで、江戸時代になって「棧瓦」という新しい瓦（方形で波状をなす普通の瓦）が工夫され、現在に至る瓦屋根の普及の基となった。

○展示資料

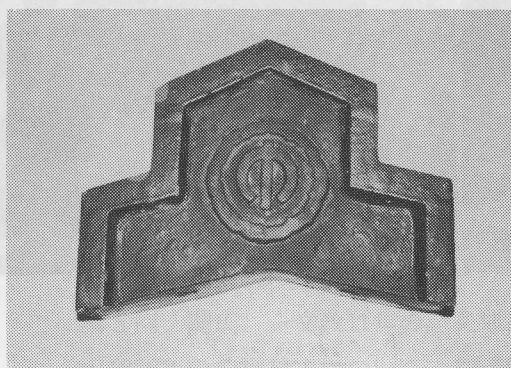
- ・鯢瓦（しゃちがわら） ・獅子口 ・鬼瓦 ・市章入りの鬼瓦 ・軒瓦 ・丸瓦
- ・巴瓦（家紋、文様をあしらった鬼瓦に取り付ける。） ・鰭瓦（ひれ） ・水鉢



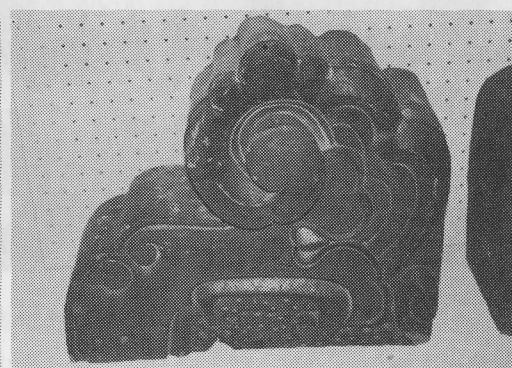
鯢 瓦



鬼 瓦



鬼瓦（加茂市の紋入り）



鰭 瓦（部分）

Ⅳ 平成10年遺跡発掘調査と出土遺物について

加茂市教育委員会社会教育課主事 伊 藤 秀 和

本年は国道403号線バイパス工事に伴い3遺跡の発掘調査、種々の開発計画に伴い7遺跡の確認調査が行われた。大規模な発掘調査が相次ぎ、加茂市の古代史にとって重要な発見があった。以下に代表的な調査例を紹介する。

① 馬越遺跡－奈良・平安－

所 在 地 加茂市大字下条字馬越地内

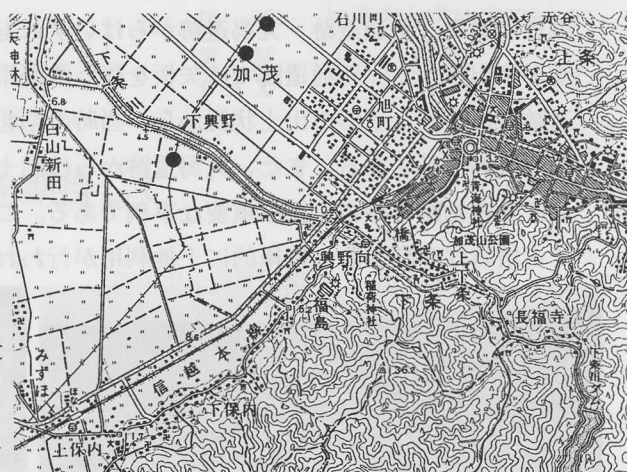
調 査 面 積 約7,000㎡（発掘調査）

調 査 期 間 平成10年7月14日～12月18日

調 査 原 因 国道403号線道路改良工事

調査の概要 調査区は水路を挟んでⅠ区、Ⅱ区と呼称した。Ⅰ区からは南北方向に走る溝跡多数、井戸5基、掘立柱建物跡6棟、土坑、ピットなどが検出された。出土した土器から8世紀中頃～9世紀中頃の集落跡であることが判る。掘立柱建物跡の中には延べ床面積が約50㎡を超えるものがあるこ

とや銅製の帯飾りなどが出土していることから有力者が存在した集落跡であったことが理解できる。Ⅱ区からも同様な溝跡が多数見られたが、それらの上に掘立柱建物跡が3棟確認でき、建物跡の周辺からは多量の遺物が出土した。土器は灰釉・緑釉陶器などを含み、ほとんどが土師器碗で占められていることからⅠ区よりも新しい9世紀末～10世紀前半頃と見られる。こちらからも、石製の帯飾りや漆付き土器などが出土していることから集落の上位の人物が住まいした場所であったことが知られる。今後の分析を待たねばならないが、当時の集落における土地利用形態が窺える貴重な遺跡である。



1. 馬越遺跡 2. 新通遺跡 3. 丸潟遺跡
遺跡位置図 S = 1/50,000



馬越遺跡Ⅰ区 掘立柱建物跡



馬越遺跡Ⅱ区 遺物出土状況

② 新通遺跡・丸瀉遺跡—古墳前期

所在地 加茂市大字加茂字新通・丸瀉地内

調査面積 約1,500m² (新通遺跡)・約2,550m² (丸瀉遺跡)(発掘調査)

調査期間 平成10年8月24日～10月30日 (新通遺跡)・9月28日～12月27日 (丸瀉遺跡)

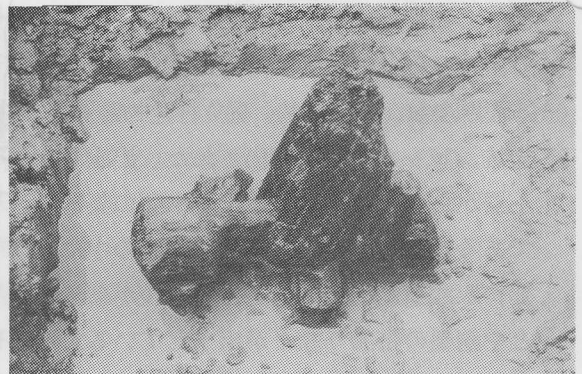
調査機関 山武考古学研究所

調査原因 国道403号線道路改良工事

調査の概要 新通遺跡・丸瀉遺跡からはいずれも、古墳時代前期の遺物を多量に包含する河道跡が検出された。新通遺跡では矢板を伴う灌漑用水路と見られる溝跡が河道跡に向かう。丸瀉遺跡では良好な土器の出土状況から、当時の祭祀の様相が色濃く窺える。また木製品も多く完形の杵が目される。また、丸瀉遺跡からは出土例の少ない枕木を持つ柱が出土し、沖積地における建物跡の様相を探る重要な事例である。これらの調査成果から加茂市域の沖積地において古墳時代前期頃から積極的に土地利用が行われていたことが明確になったと言える。



新通遺跡 河道跡検出状況



丸瀉遺跡 柱根検出状況

③ 各種開発に伴う市内遺跡確認調査

確認調査は3事業に対する7遺跡を対象に行った。県営中山間地域農村活性化総合整備事業に係わり、たて屋敷遺跡、蚊口太遺跡、草生津遺跡、伝涌泉寺跡遺跡の調査を行ったが、蚊口太遺跡から少量の縄文土器が出土したのみであった。公共下水道事業に係わる大塚遺跡の調査では少量の平安時代の土器が出土した。下条地区の県営ほ場整備事業に係わり、馬越遺跡、鬼倉遺跡が調査され、馬越遺跡から墨書土器を含む平安時代の土器が多数出土した。

編集後記

最近の遺跡発掘ブームの影響か「古きを尋ねて、新しきを知る」のムードのためか、古文書講座・歴史講演等が大いに盛会であった。ますます多くの聴講者の参加に期待する。

第6号の発刊準備が大変遅れ、多くの方々にご迷惑をかけました。御多忙中にもかかわらず短期間のうちに玉稿をお寄せいただいた溝口敏磨氏(加茂文化財調査審議会員)に感謝申し上げます。

今後とも、皆様のご支援ご協力をお願いします。